



TITLE:

奇形歯に関する研究 とくに乳前歯  
ならびに永久前歯における融合歯  
症の形態病理学的検討(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

山崎, 登

---

CITATION:

山崎, 登. 奇形歯に関する研究 とくに乳前歯ならびに永久前歯における  
融合歯症の形態病理学的検討. 京都大学, 1962, 医学博士

ISSUE DATE:

1962-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/210945>

RIGHT:

氏 名	山 崎 登 やま ざき のぼる
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 5 1 号
学位授与の日付	昭 和 37 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	奇形歯に関する研究 とくに乳前歯ならびに永久前歯における融合歯症の形態病理学的検討
論文調査委員	(主 査) 教 授 鈴 江 懐 教 授 岡 本 耕 造 教 授 美 濃 口 玄

### 論 文 内 容 の 要 旨

著者は大阪歯科大学口腔病理学教室所蔵の乳前歯ならびに永久前歯の融合歯の75例について、奇形歯、とくに融合歯の形態と、その成因の究明を目標に肉眼的、レ線のおよび小野氏歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法による観察を行ない、つぎのような成果を収めることができた。

1. 乳前歯に現われる融合歯は齶蝕や歯根吸収などにより各部の計測値は不十分であるが、総括的標準値はおおむね正常範囲内にあるも、その冠幅は全例とも平均値をやや下回り、また、永久歯の融合歯も冠幅は小さいが、その他の部分の計測値は平均値と大差はなく、根長の幾分大なるものが多かった。
2. 乳前歯ならびに永久前歯の融合歯では融合各歯が、その歯冠、歯根を通じて全体合一し、唇、舌側面的にも大差ないものが断然多いことがわかった。
3. 歯冠部における融合部の形態は乳歯融合歯では唇面に溝を示すものが隆起を呈するものよりも多く、その融合部溝は上顎例では深くて広く、下顎例では浅くて狭いものが多く、舌面では全例とも辺縁隆線は合一していないので隆起はみられない。しかし、永久前歯の融合歯では唇面に融合部の隆起するものが陥没するものよりも多く、舌面では辺縁隆線の合一するものがかなりあり、唇面の隆起するものは舌面の辺縁隆線の合一による隆起することの多いことが判明した。そして、それらのうち、中、側切歯融合症では融合部の隆起するものが多いのに、側切歯、犬歯融合症では溝状に陥没するものが多かった。
4. 根部における融合部は乳歯癒合症は全例とも凹陷して、融合部溝を呈し、それが、下顎乳中、側切歯融合症では浅くて狭いものが、また、下顎乳側切歯、犬歯融合症では深くて狭いものが多かった。また永久前歯融合症においても融合部溝は深くて広く、唇舌面的に特異点はない。
5. 融合部以外の歯冠の形態には、特殊所見はなく、歯冠の各部の発達程度は総体に低調であることが分かった。
6. 融合歯の歯冠ならびに歯根の表面はおおむね平滑で、とくにエナメル質などの減形成の所見はなかった。

7. 融合歯における歯髓腔の形態はレ線的ならびに歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法による観察に基づいて次の結果を収めた。

① 歯髓腔の全体が合一するもの、② 髓室は合一するが、根管の個別的なもの、③ 根管は合一するが、髓室の個別的なもの、④ 歯髓腔が各歯別個のもの、の4種類に区分できた。そして、乳歯、永久歯とも③が最多数にて首位を占め、④が第2位で、②、①の順序に少なかった。うち、中、側切歯融合症では根管の合一するものが多く、側切歯、犬歯融合症では歯髓腔全体の合一するものは稀で、この点は乳歯、永久歯とも共通である。そして歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法を応用することによりレ線的では到底認めることのできぬ複雑性状を把握することができた。とくに融合各歯の主根管の相互間に多数の管間側枝による連絡をなすことは複根歯から偽装不同正扁平根、次いで単純単一根への形態交流の解明に大きな示唆となる。

以上の所見により融合歯の成因は個体発生的と系統発生的と両因子を考慮することが妥当と思う。

### 論文審査の結果の要旨

隣接歯が相互に種々の程度に融合して、正常の場合よりも歯数の減少を招くことがある。これを歯牙融合症とよび、奇形歯として取り扱われている。ところが、組織発生のうえからこれを癒着歯、融合歯、双生歯などという3種に区分するよび方もあり、その分類などにも多少の混乱がある。そのみならず、これらの融合歯の成因についても異説があり、あるいは歯胚の分裂ないし發育異常であると言い、あるいは隣接する歯胚の合一によると説き、他方さらに歯の退化現象の一型とする系統発生的の見方もあって、いまだ決定的な学説はない。わが国でも現在までに多数これについての報告はあるが、そのほとんどは少数の偶発的な症例の報告にすぎない。そこで著者は、永年にわたり大阪歯科大学口腔病理学教室で蒐集保存されていた乳前歯ならびに永久前歯の融合症75例について、奇形歯、とくに融合歯の形態と、その成因の究明を目標として、肉眼的検索、レ線的観察、小野氏歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法による調査をとげた。

すなわち、乳歯および永久融合歯における各部の計測、融合程度の精査、またその精密なる形態学的観察一歯冠部における融合部の形態、根部における融合の性状、融合部以外の歯冠の形態、融合歯における表面の性状、とくにエナメル質減形成の有無などについて精検し、また融合歯における歯髓腔の形態をレ線像および墨汁浸潤歯牙透明法によって検討した。その結果いろいろと注目すべき成績をあげているのであるが、とくに墨汁浸潤歯牙透明法によって、各根管が融合歯においても個別状態のものがあつた、その場合、その各主根管が数多の管間側枝によって連絡することが判明したのは、臨床的にも意義がある注目すべき成果である。かくて、結局著者は、融合歯の成因については、個体発生ならびに系統発生上の両因子の関与を容認すべきであるとしている。

以上は不明確な点が少なくなかつた融合歯につき種々なる解明を与えたもので、したがってこの論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。